

知る・守る・繋ぐ～喜如嘉の芭蕉布指定 50 周年記念
沖縄県立博物館・美術館「芭蕉布展」関連企画 報告書

喜如嘉の芭蕉布保存会
会長 平良 美恵子

1 事業に至る経緯と事業経過

令和 6 年、喜如嘉の芭蕉布の指定及び保存会設立から 50 年を迎えた。これを記念し、沖縄県立博物館・美術館及び大宜味村と共催して『沖縄県立博物館・美術館 令和 6 年度博物館特別展 喜如嘉の芭蕉布保存会 50 周年記念「芭蕉布展 - 續まれる苧から生まれる思い- 』(以下「芭蕉布展」という)を開催することとなった。

これを受けて保存会では「芭蕉布展」をメインイベントとして据え、「芭蕉布をより深く知り・技を守り・次世代へ繋ぐ」ための 3 つの関連イベントを企画し、今回助成をいただいた「おきぎんふるさと振興基金」を活用して県民及び未来を生きる子供たちに芭蕉布そして琉球の伝統工芸の魅力や大切さを伝え、次世代へ繋ぐ機会をつくることとなった。

2 事業の体制

令和 6 年度喜如嘉の芭蕉布保存会 50 周年事業について、以下喜如嘉の芭蕉布保存会が行った。外部窓口を一本化し組合その他との連携を図るため、外部との打合わせは主に会長が担当した。他会員については内部調整や事業当日の協力、及び実演・体験等が発生する事業の準備・実施を行った。

喜如嘉の芭蕉布保存会会員 ※令和6年4月（事業開始）時点	
金城 テル	玉那覇 愛子
山城 秋子	仲田 勝子
山城 良子	稲福 スミ子
赤嶺 テツ子	桃原 秋子
稲福 千代	平良美恵子
辺士名 加代子	宮城 涼子
山城 雪枝	

喜如嘉の芭蕉布保存会と大宜味村との連絡、及び予算・助成金等の調整は大宜味村教育委員会が行った。また保存会内部その他の一部事務調整補助については、喜如嘉芭蕉布事業協同組合が協力した。

3 各事業実施報告

(1) 次世代へ繋ぐ 村内中学生招待

【実施日】 令和6年11月21日(木)

【実施場所】 沖縄県立博物館・美術館

【実施内容・状況】

郷土の誇るべき文化である「芭蕉布」について学び、博物館を通して大宜味村ひいては沖縄県の歴史文化に親しみをもつ機会の創出のため、大宜味村立大宜味中学生を「芭蕉布展」に招待した。

当日は中学1～3年生64名、また学校教職員13名も引率を兼ねて来館した。また沖縄県立博物館・美術館に要請し、「芭蕉布展」担当学芸員2名及び大宜味村教育委員会担当者による特別解説を行った。移動時間の都合上、博物館での見学時間は1時間30分程度ではあったが、生徒たちは真剣に見学し、学芸員にも質問をするなど興味関心を示しながら見学をしていた。

見学した生徒からは後日学校を通して見学の感想をもらった。参加したほぼ全員の約60個の回答がえられた。どの回答も子どもたちが素直に感動し、また見学したことでの驚きがつづられていた。紙面の都合上、抜粋して掲載する。

芭蕉布展見学感想（一部抜粋）

芭蕉布は約700～600年前からあるとわかりました。最初に見た黒い芭蕉布が印象的でした。
芭蕉布はとても大切なんだと改めて知りました。私は総合の時間に芭蕉布をテーマにまとめているのでインターネットで調べたなかの情報もあったけどさらに詳しく書かれていて博物館（芭蕉布展）はすごいなと思った。
芭蕉布の歴史がわかったし士族と庶民の服の違いや芭蕉布からの歴史背景がわかってもっと大宜味村のことが詳しく知れました。また機会があったら訪れたいです。
昔の人はみんな芭蕉布を着ていたことは少しだけ知っていたけど、色によって位が分かっていたことは初めて知ったので話を聞いて良かったなと思いました。あと、最後に見たところが一番面白かったです。
芭蕉布は身近にあるものだからあまり気にしていなかったけど、改めてすごいものだと知ることができたし、説明を聞いて知らなかったことがとてもいっぱいあって勉強になりました。
芭蕉布も色や材質によって着れる身分や行事が異なるとわかった。他にもあの色は科学染料ではなく自然の材料を使った染料で環境に優しいとわかった。芭蕉布は、自分が思っていた以上に世界から評価されている技術とわかった。
芭蕉布展を見に行き行って感じたことは、戦後でも喜如嘉は芭蕉布を守ろうと活動をして今まで受け継がれているんだと知らなくてそれを聞いたときに喜如嘉の人たちはそれくらい芭蕉布を大切にしていたんだと知りました。他にも昔芭蕉布で使われていた器具もあり、今でも使われている昔の器具もあると知りました。
芭蕉布展を見学してみて、芭蕉布の着物は藍を使って染めていて、紺色のような見た目をして

いると知りました。他にも、赤や黄色、茶色っぽいものもありました。そして、特に印象に残っているものは、芭蕉無地上衣で芭蕉の白い部分だけを使っていてすごいと思いました。また、神様に祈るときやお葬式のために使われていた大切なものだとわかりました。大宜味村に芭蕉布があることはとてもすごいことだと改めて感じる事ができたので良かったです。

芭蕉布展を見学してみて、最初沖縄県立博物館に入ったときに、とても広くて、歴史的なものが色々あってすごいなと思いました。展示している芭蕉布をみて貴族から庶民までの着物がいっぱいあって、色も違うものがあったり同じものがあったりしていて、きれいに保管しているなと感じました。それと、昔はカメラがないので、絵で生活の様子を書いているのがすごいなと感じました。



小学生についても招待をする調整をしたが、諸行事との調整や授業日数との関連で難しく、中学生のみとなった。そのため小学生の一部については別事業にて村内開催イベント（能楽公演）に招待をした。

（2）より深く知る 関連企画 「芭蕉布展関連 現地ツアー」

【実施日時】 令和6年10月5日（土）10時から14時まで

【実施場所】 大宜味村立芭蕉布会館、喜如嘉公民館

【実施内容・状況】

沖縄県立博物館の関連現地ツアーとして、喜如嘉の地で芭蕉布について体験して学ぶツアーを開催した。「芭蕉布展」では美術工芸の視点だけでなく、「芭蕉とシマの生活誌」として民俗学の視点で芭蕉布及びその原材料となるイトバショウを取り扱った。そこでツアーでは工程ビデオ上映や芭蕉布づくりの一部「苧剥ぎ」の工程について実際に体験すると同時に、「食文化」としてのイトバショウを体験する試みを行った。

かつて芭蕉の葉でおにぎりなどを包んで弁当にしていたことから、芭蕉の葉でジュシーを包む「カーサバー弁当」、イトバショウの葉鞘の中心部分「グイ」を使った郷土料理「グイズネー」などを実食し、原料であると同時に生活に寄り添ったイトバショウの魅力を知るツアーを開催した。

当初計画で 14 時から 15 時に予定していた村内めぐりについては、前日の大雨により軽微な土砂崩れが発生しており、安全の確保が難しかったため中止した。それ以外の工程については少雨程度であったため問題なく実施することができた。



参加者は 19 名であった。県内・県外問わず参加があり、また普段身近すぎて体験の機会がなかったが、ぜひ改めて学びたいということで村内からも参加があった。またツアー参加者の多くはイベント前後にあわせて「芭蕉布展」の見学に行き、より理解が深まったと感想をいただいた。さらに昼食時には区長にも参加をしてもらい、普段の喜如嘉の様子を語ってもらうなど地元とも連携した取り組みができた。

(3) 技を守る 第 50 回おおぎみ展 喜如嘉の芭蕉布パネル・写真展

【開催日時】 令和 7 年 11 月 2 日(土)～4 日(月祝) 10 時から 18 時まで
(初日 11 時から、最終日 17 時まで)

【開催場所】 大宜味村農村環境改善センター

【実施内容・状況】

おおぎみ展は大宜味村在住者・在勤者・出身者が芸術作品を出品し、鑑賞しあう作品展である。おおぎみ展は保存会の 50 周年と同じく令和 6 年に第 50 回を迎え、また喜如嘉の芭蕉布は第 1 回開催からおおぎみ展へ毎年出品しており、関連が深い。今年 は 50 回の記念として例年通りの自由テーマと同時に、「やんばる」をテーマに北部三

村及び近隣市町村在住者からも出品募集をして開催したことから、同時特別関連企画として喜如嘉の芭蕉布のパネル・写真展を行った。制作の様子だけでなく、懐かしい地元の人びとが作業をする様子や、当時よく使用されていた芭蕉布着物をリメイクして作ったワンピースなどの洋服・帽子などを展示した。



地元住民は懐かしい顔を写真に見つけ、また観覧者同士で思い出話をするなど展示を通して交流の輪が広がった。また同じ展示室内では同じく大宜味村を代表する重要文化財（建造物）であり令和7年に竣工100年を迎える大宜味村役場旧庁舎の展示も行い、文化財の普及啓発に貢献した。なお、芭蕉布会館が開館している土曜日及び月曜日は会館見学と合わせて観覧する観光客など村外からの集客があった。

（４）その他事業

① 重要無形文化財保持団体どうしの連携

【実施日】令和7年2月1日

喜如嘉の芭蕉布保存会と同じく重要無形文化財の保持団体である「久米島紬保持団体」「宮古上布保持団体」との連携を強くするための事業である。

当初計画では、「芭蕉布展」現地ツアーはじめ展示会開催中に大宜味村または那覇市での開催を予定していたが調整が難しく、実施できなかった。

そこで、同じく久米島紬についても指定20周年を迎え令和7年2月に久米島にて展

示会や講演会を開催するため、時期を合わせ3団体が集まって座談会を行った。

座談会では、協力体制（特に全国重要無形文化財保持団体協議会など）について、またそれぞれ会の組織方法や現状について話をした。各団体でバックグラウンドも含め異なるものがあるが、同じ沖縄県の織分野の重要無形文化財として共通する問題もある。そのためお互いが情報を交換し、それぞれの諸問題についてより良い方法がないかを考えていくことなど、今後の連携に対する第一歩となった。

②50周年記録冊子作製

今回助成をもらったことでの成果やそれ以外にも保存会が協力した特徴的な事業についての記録を記載した「50周年記録冊子」を作成した。

また記録冊子には付録として「保存会保管新聞記事」についても掲載した。この新聞記事は、喜如嘉の芭蕉布保存会が長年収集をしている「喜如嘉の芭蕉布」及び「沖縄工芸」に関する新聞の切り抜き記事のうち、1964年から2005年までの記事である。これらの新聞記事や掲載年月日などからは、「喜如嘉の芭蕉布」そして沖縄工芸がどのように注目され、そして重要無形文化財となっていたのかという時代の流れや、保存会会員を中心とした喜如嘉での芭蕉布づくりの様子などがうかがえる。

今後10年、20年、50年と節目を迎える際に「喜如嘉の芭蕉布」の足跡を振り返るにあたって重要な手がかりとなることから、付録として新聞記事の一覧及び注目すべき内容の記事を各新聞社からの許可のもと掲載を行った。

3 今後の方針・課題

この事業を通して、より多くの人に「喜如嘉の芭蕉布」とは何かを知ってもらい、また喜如嘉の芭蕉布をはじめとする工芸や伝統文化について普及啓発ができたと考える。そういった点で、概ね事業については成功した。喜如嘉の芭蕉布保存会は重要無形文化財の保持団体であり、「喜如嘉の芭蕉布」の手わざ伝承がもっとも重要である。しかし伝承をしていく上で、無形文化財としての「喜如嘉の芭蕉布」を理解し、応援してくれる人、同時にそれらを知ったうえで伝承活動に参加してくれる「理解者」の存在とそのための普及啓発活動は必要不可欠である。今回の関連事業を含む50周年事業の中では、重要無形文化財とは何なのか、そして「喜如嘉の芭蕉布」がどのような歩みの上で重要無形文化財となったのかについて、初めて詳しく知ったという声も多く上がった。今後も伝承と同時に、喜如嘉の芭蕉布と文化財保護について一層の普及啓発が必要であると感じた。

また本事業を含めて今年度一年間実施する中で、やはり会員の高齢化や事務体制の強化について、今後も続けていく中で課題も散見された。50年という長い年月で成熟した団地ではあるが、50年経ったからこそその課題もある。今後もこれらの課題に一步步立ち向かいながら、100周年を目指したい。

4 謝辞

今回助成を決定して下さったおきぎんふるさと振興基金事務局様、今回関連企画を行うメインイベントとなる展示会を開催して下さった沖縄県立博物館・美術館の皆様、そしてこれまでの50年保存会を内から外から様々な形で支えて下さった皆様に感謝を申し上げます。